

星野幸代・洪郁如・薜化元・黄英哲 編

台湾映画表象の現在^{い・ま}

——可視と不可視のあいだ

（あるむ、二〇一一年七月、二六六頁）

二〇一二年一月、台湾では初の総統・立法院議員の同日選挙が実施され、総統選では国民党の馬英九候補の再選が決定した。この選挙結果に関する多種多様な見方が提示されているが、いずれにせよ馬政権二期目の舵取りが容易でないことだけは確かなようだ。

その要因を台湾に則して考えるなら、台湾という島に在る中華民国の立ち位置とそこに暮らす人々の振る舞いが依然として判然としないからではないか。いいかえるなら政治・経済・文化・人的交流などの面で、「大陸に繋がる台湾」として対岸の中華人民共和国に向き合うのか。それとも「大陸とは切り離された台湾」として対岸のみならず世界に向かう道を模索するのか、ということだろう。

二〇一〇年に出版された『台湾文化表象の現在——響きあう日本と台湾』の姉妹編に当たる本書は、二〇一〇年晩秋から初冬にかけて、関西学院大学、名古屋大学、一橋大学で連続的に行われた台湾映画に関する国際シンポジウムでの講演と報告を基にして編まれている。

本書は、「一九八〇年代初期、若い映画人たち」によって台湾の映画界に開かれることになる「全く新しい一ページ」としての「台湾ニューシネマ」を中心に論じた「I 微光と陽光の修辭学——台湾ニューシネマから電影新世代へ」と、一九九三年に台湾で発掘された「日本統治時代に撮影されたドキュメンタリー映画の数々」の分析を軸に、最近の台湾ドキュメンタリー作品を論じた「II 転位する記憶と記録——台湾ドキュメンタリーの現場」の前後二部から構成されている。

「I」には六本、「II」には八本の論文が収められているが、共に大部分が台湾の映像作家や研究者の作品であ

り、それだけに広い意味での現代の台湾映画人の台湾映画が抱える問題や映画という表現方法に対する不満、苛立ち、焦り、反省などが行間から浮かび上がってくる。おそらくそれは、そのまま一種宙ぶらりん状態のままに推移する「台湾の現在」に繋がるからであろう。

編者の一人である星野幸代は、我が国を襲った「3・11」への台湾からの迅速で篤い支援に「台日関係を再認識させられた」と語る。一方、同じく編者の洪郁如は「近代以降の台湾社会の複雑性と重層性」が「台湾映画はつねに台湾社会の歴史と結び付けて鑑賞される」性格をもたらしたとした後、「映画をテクストとする文学、歴史学、社会学研究の間でも、学問領域の伝統と特質からくる視点と方法論の異同」は十分に論じられてはいないとする。

星野、洪の両者の咬きを基点に、さらに深化した台湾映画論を期待したい。

（樋泉克夫）